

「1611年慶長地震津波400周年シンポジウム」を開催しました(2011/12/12)

12月2日(金)、本センターが所属する東北大学防災科学研究拠点の主催で「1611年慶長地震津波400周年シンポジウム」を本学青葉山キャンパス・工学部中央棟2階大講義室にて開催しました。当日は、慶長地震津波(1611年、慶長16年)が発生した日で、今年でその発生から400周年にあたる日でした。この地震・津波は、北海道東方沖地震津波と関係する可能性のある地震で、再検証する必要があると言われ、東北地方太平洋沖地震後に注目されています。さらに、当時も甚大な被害を受け、その後様々な復旧・復興の事業が展開され、地域の発展に結びついたと言われています。東北大学防災科学研究拠点では、この慶長地震津波および復興について議論を深めるためのシンポジウムを開催しました。前半3つの話題提供については、ゲストスピーカーを招き、羽鳥徳太郎先生(元東京大学地震研究所)より、調査・観測記録に基づく慶長地震津波の規模について、首藤伸夫先生(東北大学名誉教授)より、当時の文献と現場踏査に基づく宮古周辺での被害状況と復興について、都司嘉宣先生(東京大学地震研究所)より、当時の文献と地震学的知見にもとづく慶長地震の特性(プレート境界型地震のあと、アウターライズ正断層地震が発生した可能性)について講演されました。後半2つの話題提供は、防災科学研究拠点に所属する教員が行い、蝦名裕一研究員(東北大学東北アジア研究センター)より、古文書解析から浮かび上がる慶長地震津波の像と東日本大震災との類似性について、今井健太郎助教と菅原大助研究員(東北大学災害制御研究センター)より、数値解析シミュレーションにもとづく津波痕跡情報の説明可能性について検証について講演されました。会場からは活発な質問が相次いだほか、シンポジウム後のマスコミ取材が主催者や講演者に殺到しました。防災科学研究拠点では、文・理が融合した慶長地震津波の研究の大きな一歩が踏み出されたシンポジウムとなりました。平日の夕刻にも関わらず、約180名の方が来場されました。

※<http://www.dcrc.tohoku.ac.jp/surveys/20110311/event.html>から
発表資料をDLできます。

当センターの構成員が発表したタイトルは次の通りです。

菅原大助、今井健太郎、今村文彦：慶長地震津波の数値解析

